子どものいる暮らし―男・夫・父

単身赴任者の子育て便り

岩立志津夫

家族はできれば一緒に生活する方が自然としても、事情によって離れ離れの生活を続ける家族は多くあります。我が家のケースもその一つで、家族（妻と二人の子ども）を東京の小平に残して、僕は静岡での単身赴任生活を続けています。また、僕は発達心理学を専門とする大学の教員で、現在「育児論」の講義も担当しています。その僕が、どんな形で育児に係わっているか、そんな興味からか、知人の一人からこの欄での原稿執筆の打診が

ありました。どうしよう？　断わろうか？　ちょっと迷ったけれど、普段思っていることをこの機会にまとめるのもいいかもしれない、と考え直して、引き受けました。

僕にとって育児は、週末だけとしても、生活の大きな部分を占めています。しかもこの育児は現在の出来事としても、それにとどまらず、多数の複線で過去に結びつき、多数の可能性として未来に開けています。そこで、過去・現在・未来の三つの視点から、僕にとっての育児について率直に述べてみたいと思います。

まず過去の出来事からお話ししましょう。その内容は、独身時代のあるエピソードと出産前後の体験です。エピソードは、他愛もない、一人の男の思い込みを作りました。時は十五年程まえの独身時代にさかのぼります。僕はファミリーレストランで夕食をとっていました。その時、隣の席に父親とおぼしき男と中学生ぐらいの女の子が座りました。学生時代から家族というものに興味、憧れ、夢などの複雑な気持ちを持っていた僕は、その二人に気づかれないように観察していました。そして、あることに気がつきました。この二人の間には会話がほとんどなかったのです。食事を注文する時ちょっと言葉が出ただけで、食事中両方とも押し黙り、お皿の食事をじっと見ているだけで、互いの顔を見ることも決してありませんでした。楽しそうでもありません。結局そんな状態のままで食事を終えて、帰って行きました。

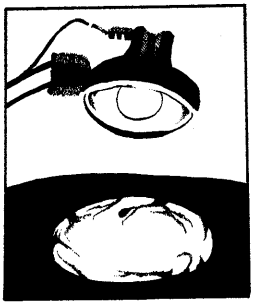
どうして二人の間に会話がなかったのか、

真相はわかりません。もしかしたら、父娘ではなかったのかもしれません。しかし、独身の僕にはショックで、この経験は現在の僕の育児に大きな影響を与え、一つの思い込みを植えつけました。その思い込みとは、「時間やものの共有へのこだわり」と言えます。ここでいう「もの」には、興味や食べものなど具体的なものから価値観や人生観のような抽象的なものまで、多様なものを含みます。どれにしろ、人間が語りあう時、お互いに共有するものがないと会話は続かない、それが僕の思い込みの内容です。友達同士でも、夫婦でも、そして当然親子でも、共有しあうものがないと、会話ははずみません。ところが親子の場合、ものの共有はなかなかうまくいきません。親子は偶然で結びついた人間関係という側面があるからで、子どもの興味と親の興味は一致するとは限りません。しかし時間の共有は、親の方で努力をすればある程度可能です。

次の話題に移りましょう。二人の子どもの出産場所は、僕が勤務している静岡でした。妻は、勤務地に近く実母や友人の多い東京での出産を希望しました。しかし、僕の強い希望で静岡にしてもらいました。理由は小さな理由と大きな理由の二つがありました。小さな理由は、むかしから日本で習慣化している里帰り出産に反対だったからで、大きな理由は全面的に出産や乳児の世話に参加したかったからです。また単身赴任の僕にとって、家族と一緒に生活できるチャンスはこの時しかありませんでした（実際、妻と同居したのは

この時だけです）。出産にも立ち合いたかったし、ラマーズ法にも興味がありました。でも、出産予定の病院ではラマーズ法は不可能だったために諦め、出産立ち合いも直前になって出産が帝王切開になったため実現しませんでした。とは言え、出産立ち合いの条件だった夫婦揃っての妊婦講習への参加は、いい思い出です。男性の参加は僕だけと思っていたら、何人かの夫と会いました。

出産してからの育児は確かに大変でした。最初のはるひこの時には、夜泣きと排泄回数が多かったからで、次のあやかの時には、上の子の静岡での保育園通いと出産直後の大病が重なったからです。はるひこの育児では最初のこともあり、育児用品（ほ乳びん、紙おむつなど）を全種類買って試しました。あやかの時は、生後一日目から両方の肺が気胸になって小児病棟への緊急入院、抱くこともできずに、生死の境をさまよう娘を遠くから眺めるしかありませんでした。妻の退院直後には僕自身が下血し、同じ病院の外科に緊急入院となりました。この事態ではどうにもならず、高齢の妻の実母に静岡に来てもらって、どうにか危急の時期を乗り切りました。幸い僕の病気は一時的なものと判明し、あやかの



病気もどうにかおさまって、僕、あやかの順番で退院しました。祖母は帰京し、夫婦二人の育児に戻りました。しばらくしてのあやかの退院の日、元気だけどやせ細った娘と病院を出た喜びは今でも思い出します。

次に、現在の話をしましょう。時々大人は子どもに「〜ちゃんは、お父さんとお母さんのどっちが好き？」と尋ねます。我が家の場合このような質問を受けると、時によって多少の違いはあるとしても、もうすぐ三歳になるあやちゃんは「きょーちゃん（母親のこと、我が家では「お父さん」「お母さん」という呼び方はしていません）」と応えます。現在八歳になるはるちゃんの場合はちょっと複雑で、母親に怒られた後などは「やさしいからしーちゃん」と言ってくれることもありますが、夜に寝床で母親に甘えたい時の様子を見ると、本心はやっぱり「きょうちゃん」のようです。

この文章を書いている十一月に入って、幸い僕には仕事が入っていないので、全ての土日は東京の自宅で過ごすことになりました。ところが妻の方は大忙しで、勤務先の仕事や親戚の七回忌などで、土日が不在の日が続いています。十一月に入って二週間続けて、土日は終日、二人の子どもの世話を僕が主に担当することになりました。我が家では、家事・育児に関して共同参画の原則が決まりなので、このような場合、全ての仕事を僕が引き受けることになります。妻は事前のお膳立てをすることもなく、「ジャーお願いね」という感じで出て行ってしまいます。

例えば十一月十五日の日曜日には、あやちゃんが寝ているので寝ぼけているはるちゃんに留守番をお願いして妻を駅まで車で送っていきました。家に帰ると子ども二人はまだ眠っていたので、早速食事の用意をして、起きてきた二人に食べさせました。その後、着替えさせて、掃除と洗濯をしました。あやちゃんは外に行きたがりました。はるちゃんも最近買ったパソコンのI-Macでゲームをしたがりました。しかし、はるちゃんは宿題が済んでいないので（常に自分から宿題を済ませることがないので、最近親子喧嘩が頻発しています）、それを済ませてからと伝えて、あやちゃんと外に行きました。娘は行きつけの公園に行くことが希望でした。しかしこの何週間かその公園行きが連続していたので、親の一存で、久しぶりに少し遠くにある仲町図書館に自転車で行き、五冊の本を借りました。一冊は僕が読みたい『クマのプーさん』の原作本で、残り四冊はあやちゃんが選んだ絵本『いやだいやだ』などです。図書館の帰りに途中の公園で遊んだ後、買い物をして帰宅しました。昼食後は、いつものように添い寝であやちゃんの昼寝につきあいました。はるちゃんは友達と遊ぶために出かけました。あやちゃんが起きてからは外出し、バドミントンを買って来て、自宅近くの広場で遊びました。そして夕方、これで一日の終わりです。

「なんと平穏な日々、でも今日僕は何をしたのだろうか?」と最近時々思うことがあります。子どもと接することは確かに楽しい面が

あるとしても、正直言って、長時間大人が子どもと過ごすことには苦痛を感じるのも事実です。小さな子どもとボール投げをする時、子どもは本当に楽しそうにその行為に夢中になっています。滑り台に登る時の子どもの笑顔は、作り笑いに慣れた大人の顔では絶対に見られないものです。でも、大人は一部の人を除いて、そのような世界に長時間入り続けることはできそうもありません。僕もそうで、時々妻とバトンタッチが必要になります。僕は育児に際して「男性だから……」という制限を設けずに来ました。それを実践するために、デイバッグにおむつを入れて乳児を抱っこヒモで抱いて学会に出席したこともあります。夜泣きにもつきあいました。でも、専業主婦のように長時間子どもと過ごすことは避けています。僕にはできません。

次に未来の話をしましょう。これは簡単です。僕は、子どもとの時間や場所の共有が未来のよい関係に結びつくと信じています。おむつ換えの日々、妻と浴びたうんち鉄砲、苦労してつくった離乳食を何度もひっくり返された経験、公園の鉄棒でのくるりんこ、三輪車がころんでできた額のきずあと。それらは未来の子どもとの関係づくりの種です。今後も子どもとの思い出という種づくりは続きます。でもこんな父親の思いを知って、子ども達は「親の身勝手」と大人になって言うかもしれません。でもいいのです。

（静岡大学）